

---

# 沙世より 2

猫田セバスチャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沙世より2

### 【Nコード】

N6049G

### 【作者名】

猫田セバスチャン

### 【あらすじ】

人の悪を、イメージや、映像や、肉眼で捉えることができる沙世のストーリー。

椎崎は苛立っていた。

プライベートなど無論、なく犯人の足取りを追っていた。

上からの圧力と、警察の威信にかかわる。

と仲間たちは焦ってはいるが、椎崎にとって、そんなことはどうでもいい。

ヤツを、そう犯人を、この街のどこかで、のうのうとのさばらしてなるものか、

この手で制裁を加えてやりたい。

椎崎は怨んでいた、悪を強く。魂を賭けるに値する行為。

犯人がどんなヤツかなんて知らない。

この世から消えるものに、存在証明など、はなから皆無。

それは己のすべて。椎崎には何も無い。椎崎には何も残されていないかった。

「おい、椎崎っ！。ホシの居場所を捉えたぞ！車に乗れっ。」  
けたたましい音とともに車のドアは閉まった。

沙世は静かに暮らす。

家にいるときは、いつも、健康に細心の注意を払う。

どんなにお金がかかるうとオーガニックのものを好んで喰した。

野菜と、肉と魚をバランスよく摂取する。しかし、肉はほとんど鳥の胸肉しか喰さない。脂身が苦手だった。

広い部屋の一室。運動器具が所狭しに並んである。

走ることすら、外に出る必要はない。壁には大きな鏡が張り付けてある。

自分の体を隅々までチェックする。だが、けして自分の体に惚れ惚れする

ことはない。あくまでも体のバランスをチェックする為だ。

プロポーション、そして体の左右のバランスも完璧だった。

沙世は、そうして汗を流して過ごす。

音楽はジャズを流す。

小刻みに刻む、ドラムのビート。計算され尽くされた正確さ。

完璧なものに触れていることが、沙世の心を僅かばかりだが満たしていく。

沙世は植物も同様に愛した。家の中の至るところに、植物を置いているのだが、

そこには花はない。すべて観葉植物だ。中には珍しいものもあり、ミリ単位で

栄養剤の扱いに苦心するのを好んだ。

「姉さん、元気になっているかい？こっちは相変わらずだよ。

この間、話した、お気に入りの樹の病気は治った？原因を僕なりにネットで

調べてみたのだけれど、実際に生息している場所はアフリカのものだよ。

気温は調節しているみたいだけど、湿度はどうか？よくなるといよね。

そういえば、今度、僕の個展をやることになったんだよ。

ちよつとした賞も貰えたんだよ。クライアントがロンドンのギャラリを貸切ってくれるんだって。作品の製作にも力が入っているところだよ。

写真は、アート仲間のジョンだよ。あと、端っこで笑顔がチャーミングなのが

今のガールフレンドだよ。

この間、仲間に姉さんの写真を見せたら、どうやったら、彼女に

求婚できるんだい？って言っていたよ。浮いた話があればすぐに聞かせてくれよな。  
姉さんは僕の誇りだよ。

ロンドンより愛を込めて

Takasaki

夜の11時、沙世は弟へのメール返信を終えた後も、仕事で必要なプログラムの入力が続けていた。明日までに提出するものの、最終確認と

手直しをする。

まずい、CD-Rが在庫切れであることに気づく。しまった、今から手配しても間に合わない。沙世は渋々、車でコンビニへと向かう。体にびったりフィットしているロングTシャツに、細身の黒のジーンズ。

髪は後ろで束ね、化粧はしていない。沙世の肌は化粧を必要としな  
いほど、

若若しかった。大人の女としての色気もあり、性別が関わらずとも見るものの心を奪うことは容易だった。浮世人のような、そこだけ世界が違うような

錯覚を人に起こさせた。

コンビニに入ると、カップルや、会社帰りのサラリーマン、店員はこの間の

男とは違う、長髪の男が一人いるだけだった。目当てのものを手に入れ足早に去る。月はいつになく、そこにありありと輝いていた。乾燥した風が吹き、

もう冬は目の前に来ていることを、静かに告げていた。

「ガチャ」

玄関の鍵を開け中に入ろうとしたとき、背後で人の気配を感じ沙世

は振りむいた。

そこにはこの間の、コンビニの店員、例の犯人の男が立っている。

「見つけたぜえ、ねえちゃん。」

そう言うと、男はナイフを取り出し、沙世に突きつけた。

「それで、私を刺すつもりなの？」沙世は一切の動揺もせず言う。

男は鼻で笑いながら、「その前に楽しませてもらえねえかな。」

沙世に近づきながら、ナイフを揺らす、刃渡り20センチはあるのか、

そのナイフは月の光りに照らされ光っている。

それと同時に沙世は男がしてきた事全て知る。そして、

「クズね。」と吐き捨てた。男は血管を浮き上がらせて、なんだと？！と言う。

「待て」

そういつて二人の傍を静かに男が歩いて来る。

沙世は暗いながら、その男を知っていることに気づく。

「誰だおめえ。殺されてえのか？失せる。」

黒い男、そうこの男は椎崎といった。

椎崎はゆっくり近づいていく、まるでこれから死刑台に上がるかのように

ゆらゆらと、一歩ずつ踏みしめていく。

「浅岡海斗、お前を逮捕する。」椎崎が言い放った瞬間。

犯人の男、浅岡はナイフを後ろに引き、沙世めがけて突いてきた。

ヒュッ、

ナイフの刃は、沙世の顔の目の前、僅か数センチのところまで止まっている。

浅岡のナイフを持っている手が震えている。

沙世は気づく、暗がりだが、浅岡の右腕の手首と肘の間くらい、黒いもやみみたいなものが纏わりついていた。

よく見るとそれは、少し離れた椎崎から、伸びている。

沙世が、少し後ろに後退りするのを確認して椎崎は浅岡の傍まで踏み寄る。

黒いもやは、椎崎の右手から出ていて、今も浅岡の手を抑えている。

「なんだよ、動けねえ」そう浅岡が言った瞬間。

椎崎は余った左手で浅岡の顔面を殴打した。

鈍い音とともに、浅岡の顔がゆがむ。しかし、椎崎は手を止めずに次ぎを放つ。

その身長から振り出される拳は的確に顔面を捉えていく、浅岡は身動きが出来ず、どんどん顔が變形していく。何度も繰り返し殴った。

「椎崎っ！それ以上はやめろっ。」そこで、何人かの男が拳銃を構えながら

走って周りを囲む。

そして、殴りつける椎崎をむりやり押さえつけた。

どうやら今夜は、すんなり眠らせてはくれなさそうね、

沙世はそう考えながら浅岡を睨みつけている、その黒い男を眺めていた。

辺りの木々はざわつきながら、月に照らされる。星たちは今夜は長い、と言わんばかりに神々しく輝き続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6049g/>

---

沙世より2

2011年1月16日02時45分発行